

第18回 南のシナリオ大賞

優秀賞

私の声が嫌い

両角 美貴子

登場人物
甲斐瑞貴（20） 大学生
高梨由利（20） 瑞貴の友人
甲斐泰輔（54） 瑞貴の父親
岸田友介（28） 聴覚障害者
マスター
ラジオDJ（女性）
講師（女性）（40代） デイレクター

甲斐瑞貴（20）は大学2年生。友人の高梨

由利（20）と手話サークルに入っている。瑞

貴は自分の低い声が嫌いで、声を出さずに会

話ができる手話に興味を持ったのだった。瑞

貴が自分の声を嫌いになったきっかけは父で

ある。瑞貴と父親を置いて出て行った母親の

声に瑞貴の声が似ているから「嫌いだ」と、

14歳の時に言われたのだ。

しかし、瑞貴はその父親から意外な懺悔を

聞き、驚く。父は母の低くてハスキーな声が

好きだったために、声の似ている瑞貴に八つ

当たりをってしまったと言ったのだった。

本当は、瑞貴も母の声が好きだった。ボラ

ンティア活動で知り合った聴覚障害者の男性

に「自分の声を好きになってみたら」と言わ

れ、瑞貴は新しい夢に向かって挑戦を始め

る。それは声を仕事にすることだった。

そして卒業後、瑞貴は故郷に戻り、地元の

ラジオ局・FM宮崎で、憧れのラジオパーソ

ナリテイになる。

SE 大学の学食のざわめき

瑞貴「食べながら」学食のカレー、前より肉

が減った気がする。ねえ、由利、ミートソー

スはどうか？」

由利「ミートソースはどう？ って、瑞貴、手

話でやってみてよ」

瑞貴「やだ。食べてるのに」

由利「実技試験に向けていつでもどこでも練習

しなくちゃ」

瑞貴「手話通訳士の学科試験終わったばかりだ

よ。まだ合格してるかもわかんないのに」

由利「合格したら9月には実技試験じゃない。

2か月しかない」

瑞貴「由利は一発合格目指してるから熱心だけ

ど、私は……別に」

由利「瑞貴は私に誘われて手話サークルに入っ

たから、仕方なくやってるって感じ？」

瑞貴「確かに熱心じゃないけど、仕方なく始め

たわけじゃない。手話ってさ、声を出さずに

誰かと話せる。それがいいなって思ったから
学びたくなったの」

由利「声を出したくないから手話を学ぶって、
変な動機だよな」

瑞貴「だって……私さ、自分の声、ホント嫌い
だから」

由利「確かに女子としてはちょっと低いけど、
個性的でいい声だと思うけどなあ」

瑞貴「それが劣等感なの。冷たく聞こえる」

由利「劣等感って手話でどう表現したっけ？右
手と左手の4本の指を直角に折って」

瑞貴(MO)「私の父親は私の声が嫌いだ。そ
う言われたのは中学2年、14歳のとき。あ
の夏も今年のように暑かった」

SE 蝉の鳴き声

瑞貴「ねえ、お父ちゃん。脱いだもんまたう
っせらかす。洗濯カゴへちゃん入れてよ！」

甲斐「お前の声は俺たちを置いて出たって母さ
んにそっくりだな」

瑞貴「えっ！」

甲斐「女のくせに低い声しよって……冷たか」

瑞貴「低くて……冷たい」

甲斐「声が似ちよると言い方まで似ちよつと。

俺の前で大きん声を出すな！ 嫌いなんだ。
そんな声が！」

瑞貴(MO)「そう怒鳴った父の声を忘れたこ
とはない。だから私は自分の声が嫌いだ」

SE 大学の学食のざわめき

由利「ねえ、今度の日曜日、付き合ってよ」

瑞貴「つきあうって何を？」

由利「近所で月に1回、『ふれあい広場』って

いうイベントがあるの。聴覚障害者と、手話
ができるボランティアが集まるんだ」

瑞貴「手話のボランティア？」

SE ホールのざわめき

由利「ここが『ふれあい広場』かあ。意外に
人が集まっているね」

瑞貴「私の手話通じるかなあ……自信ない」

由利「瑞貴はほら、あの人がいんじやない？

岸田友介ってネームつけてる男性」

瑞貴「ああ、1人で座ってる人？」

由利「20代後半って感じ」

瑞貴「やだな。神経質そうな感じがする」

由利「見た目で判断しないの。頑張ってるね」

瑞貴(MO)「私がどきどきしながら岸田さん
の前に座ると、彼は、両手の人差し指を向
かい合わせるように立て、指先を曲げた。

『こんにちは』という手話の挨拶だ。それ
から私に気を遣ってくれたのか、手話と一
緒に、しぼりだすようにゆっくりと声を出
した。発話もできるのだ」

岸田「どうして、しゅわに、きょうみを、もつたの？」

SE カフェの中

SE 麦茶をそそぐ

瑞貴(MO)「よくある質問だが、ぶっちゃけ

こうで、なんて正直には言えない」

岸田「ドラマをみて、しゅわに、ロマンを求められても、こまるんだよね」

由利「緊張して喉乾いたからアイスコーヒーが

おいしい。ねえ、瑞貴、どうだった？」

瑞貴「悪いけど、私はもう参加したくない」

由利「ええつ、そうなの？ どうして？」

瑞貴「どうしてって……とにかく、ごめん」

由利「謝らなくていい。それより、夏休みは田舎に帰るの？ 実家、どこだっけ？」

瑞貴「宮崎県の高千穂。知ってる？ 神々の故郷って呼ばれてるところだよ」

瑞貴(MO)「私は必死に右手を左右に振った。

それは『いいえ』という意味だ」

瑞貴「宮崎県の高千穂。知ってる？ 神々の故郷って呼ばれてるところだよ」

岸田「では、なぜ？」

SE 列車が走る

瑞貴「ひとの、やくに、たちたい」

岸田「ほんとうに？」

瑞貴「はい」

岸田「しゅわでも、うそは、わかるんだよ」

車掌アナウンス「高千穂、高千穂。次は高千穂に停車いたします」

SE 木造の引き戸を開ける

瑞貴(MO)「岸田さんは人差し指をほったに当たった。それは手話で『嘘』を意味する」

瑞貴「ただいま」

瑞貴「お父さん、麦茶」

甲斐「ああ」

瑞貴(MO)「父親と向かいあって夕ご飯を食べているが、特に話すことなどない。……話したくもないし」

甲斐「瑞貴、大学はどうだ？」

瑞貴「うん……別に」

甲斐「なあ、父さんを驚かす報告とかないのか？ 彼氏とか？」

瑞貴「……いないから」

甲斐「久しぶりに帰ってきたんだ。少しは気を遣って東京の話でもしてくれ」

瑞貴「お父さん……私の声が嫌いでしょ」

甲斐「えっ」

瑞貴(MO)「父も、昔私に向かって怒鳴ったことを覚えているのだろう。何か言いたそうにしたが、結局、黙りこんでしまった」

SE 蝉の鳴き声

瑞貴(MO)「父とは気まずいまま夏休みが終わり、私は東京へ戻った」

SE スマホの呼出音

瑞貴「もしもし、お父さん？ 用事があるならメールにしてよ」

甲斐「どげんしても電話したかったんだ。お前の声が聞きたくてな」

瑞貴「えっ、私の声が聞きたい？」

甲斐「夏休みに帰って来た時、話そうかと思

いよつたが……言えんかってな」

瑞貴「何の話？」

甲斐「母さん、死んだげなぞ」

瑞貴「そう……お母さん、私が中学にあがると待つてたかのように家を出てったよね。私とお父さんを捨てて」

甲斐「人づてに聞いたから、父さんも葬式に出ちよらん。どげん最後だったかもよくわからん」

瑞貴「ふうん……そうなんだ」

甲斐「実はな……父さんは母さんの声が大好きやった。少しハスキーで、やさしく響く声しよつた」

瑞貴「はあ？ お母さんの声が大好き？」

甲斐「離婚届おいて黙って出てった後、一度だけ母さんから電話がきよつた」

瑞貴「……へえ」

甲斐「瑞貴のこと頼みますって、言いよつた。そんな声がいい声でなあ……耳に残っていつまでも離れんかった」

瑞貴「いい声だった？」

甲斐「それが辛くて苦しくて腹が立って……母さんの声が恋しくくてな。お前に八つ当た

りしちよつた……すまんかったな」

瑞貴「そんな……今さら謝られても」

SE 自動ドアが開く

由利「やだ、瑞貴、どうしたの？ ふれあい広場に来るなんて。手話ボランティアはもうやらないって言ったくせに」

瑞貴「ちよつとね、岸田さんともう一度話してみたくなつたんだ。あつ、あそこに座ってる」

SE 椅子を引く

瑞貴「キシダさん、こんにちは」

岸田「おどろいた。もう、こないと、おもつた。きみを、こまらせたから」

瑞貴「あなたは、ただしい。わたしは、うそをついた」

岸田「どんな、うそ？」

瑞貴「しゅわを、はじめたのは、ひとのやくに
たちたいから。それは、うそです」

岸田「ほんとうの、りゆうは？」

瑞貴「じぶんの、こえが、きらい」

瑞貴（MO）「手話で『声』という単語は、右

手の人差し指と親指で輪を作り、喉から弧を
描きながら前を出す」

岸田「きみは、どんな、こえを、してるの？」

瑞貴「すこし、ひくくて、つめたい、こえ」

岸田「きみに、にあってる」

瑞貴「わたしに、にあってる？」

岸田「きみだけの、こえって、かんじがする。

すきに、なってみたら？」

瑞貴「じぶんの、こえを、すきになる？」

岸田「きつと、いいこえだろうな。ぼくは、

きみのこえが、きいてみたい」

瑞貴「わたしのこえが、ききたい？ ありがとう
う、キシダさん」

SE ドアベルの音

マスター「いらつしゃい」

瑞貴「コーヒークださい。今日のブレンド」

瑞貴（MO）「ぼんやりしたい時、この珈琲

専門店に来る。やぼったい感じのマスターな
のに、いつも季節の花が飾られていて、FM
ラジオがいい感じで流れている」

SE ラジオ番組

DJ「今日はどんな一日でしたか？ どんな日

であっても、あなただけの大切な時間は知ら

ぬ間に過ぎてゆきます」

瑞貴（咳く）……お母さんの声に似てる」

DJ「今という時間を大切にすることは、あ

なた自身を大切にすることと同じです」

瑞貴（咳く）ああ……いい声だなあ」

瑞貴（MO）「気づいたら涙が溢れていた……

私もお母さんの声は好きだった。でも、その
ことをずっと認めたくなかったのだ」

SE 大学の学食のざわめき

由利「（食べながら）瑞貴。学食のカレー、ほ
んとに肉入ってないね」

瑞貴「由利。私、手話サークルやめる」

由利「ええつ、やめて何すんの？」

瑞貴「うん……お父さんとお母さんに復讐でも

しようかなって思ってる」

由利「復讐って！ どうやって復讐するの？」

瑞貴「私、アナウンス学院に入学することにし
た」

SE アナウンス学院の教室

瑞貴・生徒たち「あえいうえおあお かけきく

けこかこ させしすせそさそ（続く）」

講師「甲斐瑞貴さん」

瑞貴「はい、先生」

講師「あなたは声が低めだから、前へ響かせる

ように意識しないと、ぶつきらぼうに聞こえてしまうわよ」

瑞貴「(小さく) はい」

講師「そんな風に顎を落としてはダメって言ったでしょう。もつと胸をはって」

瑞貴「はい、カラオケの個室で練習します」

SE カラオケの個室

瑞貴「さーと、今の録音、聞いてみるか」

SE スマホの操作音

瑞貴(録音)「拙者親方と申すはお立会の中

にご存じのお方もござりませうが、お江戸を発つて二十里上方相州小田原一色町をお過ぎなされて青物町を……(続く)」

瑞貴「もう最悪。ゾンビの声みたい(ため息)

……でも、何度でも練習しなくちゃ。自分の声を好きになるまで」

M ブリッジ

SE ラジオ局・スタジオ

瑞貴(MO)「私は大学を卒業後、地元のアジオ局に就職した。そして、大好きな自分の声を故郷の空に響かせている」

ディレクター「音楽終わるよ、キュー」

瑞貴「エフエム宮崎をお聞きのリスナーの皆様、こんばんは。パーソナリティの甲斐瑞貴です」